

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価
			実践状況	実践状況
<b>I. 理念に基づく運営</b>				
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を踏まえ、事業所の年間目標、個人の半期ごとの目標を立てて取り組んでいる。月曜日の朝礼時に法人理念の唱和、毎朝礼時に事業所の目標を唱和し、実践につなげている。	運営理念や年間目標は朝礼にて唱和し支援に取り組んでいる。家族には利用契約時に説明し、玄関にも掲示し理解を頂いている。職員の勤続年数が長い分、時として親しみの余り馴れ合い気味になる時もあるが、その都度さりげなく管理者が注意するようにしている。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近くの小学校、保育園の運動会や音楽会に招待して頂き、毎回数名ずつ利用者様をお連れしている。近所の住民の方が野菜や果物、花を届けてくださる。	地域の行事については民生委員より案内を頂き、敬老会等に参加している。近くの保育園の運動会にも招待され園児との交流を楽しんでいる。また、社協主催の「ふれあい広場」に利用者の作品を出品し見物にも出掛けている。腹話術などのボランティアの訪問を受けたり近隣の住民より野菜の差し入れを沢山頂くこともあり、利用者との顔なじみの関係が築かれ気軽に話をする事ができている。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	現在町が主体となって開催している認知症カフェの運営の協力依頼があり、場所の提供は難しいが、開催に向けての協力は前向きにしていきたい旨をお伝えしている。	
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	区長の任期が1年であるため、理解を深めるまでには至らないが、世間で認知症高齢者に関するニュースがある度に、委員の方々の率直な思いを聞かせて頂く事ができている。	奇数月の第2水曜日、午後3時30分より、家族代表、隣接する2地区の区長、民生委員、町担当者などの出席で開催されている。運営報告がされた後、「区長の任期について」を初めとして町の担当者に介護施設についての質問・要望等話し、ホームに対しての要望もいただき積極的な話し合いが行われている。会議の内容は議事録にて開示され出来ることは改善しサービス向上に役立てている。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	空床が続いた時期には、居宅のケアマネジャーへの空き情報の発信方法等、親身になってアドバイスをもらえた。町からの要請があれば、家族の会への参加もしている。	空き情報について町の地域包括支援センターに相談し、情報発信等アドバイスを頂いている。町が28年度に実施する「認知症カフェ」についてグループホーム中心で行うということで様々な相談をしている。介護認定の更新は認定調査員が来訪され家族立会いの上ホームで実施している。町主催の認知症講演会へも参加している。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	基本的には身体拘束をしないケアに取り組んでいる。安全確保のため玄関の施錠や、センサーマットを使用している利用者様もいる。	身体拘束は行わない方針で玄関は開錠を目指しているが現在は安全確保のため施錠している。所在確認を小まめに行い事故の起きないケアに取り組んでいる。入居間もない利用者で離脱傾向の強い方が数名いるが、話を聞いたり、ホーム内を一緒に歩いたり、また、外に散歩に行くことで対応している。拘束や虐待についてはホーム内で研修を行ない徹底を図っている。

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	世間で虐待のニュースがある度に、法人から注意喚起の周知がされる。その機会を活かし、介護者である自分たちのどのような言動が虐待に当たる可能性があるかを振り返っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する知識は現状では全体的に不足している。今後は制度の基本的な理解から勉強を始められると良いと考えている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては、入所前から入所後まで、丁寧に説明するように心がけている。料金改定等の際には、法人内のグループホームで統一した文書を担当者に作成してもらい、ご家族に配布している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時に利用者様の最近の様子をお伝えしながら、要望等も汲み取るように意識している。面会時の利用者様、ご家族の様子を記載し、双方の思いを理解できるように努めている。	家族の来訪は週3回から月に1、2回と比較的よくある。面会時に状況報告を行い要望もお聞きし支援に取り組んでいる。家族会も夏祭りや年度末に行われ、殆どの家族が参加されている。食事とボランティアの出し物があり、3月には職員の異動紹介もあり職員とのコミュニケーションを図りながら楽しいひと時を過ごしている。ホームの「ほのぼのたより」が年5回発行され家族に喜ばれており、利用者個々の「おたより」も請求書に同封し暮らしぶりをお知らせしている。。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議やカンファレンスでは事前に議題を収集したり、内容を知らせて意見を準備できるようにしている。毎日振り返りを行い、日々の疑問や課題も解決できるように努めている。	月に1回、第2木曜日に、研修会30分、会議1時間30分の配分で定例職員会を行っている。事前に会議で話し合う要望や意見を聞き、活発な話し合いの場となるよう心掛けている。目標管理制度があり半年毎に自己評価、振り返りを行い、管理者による個人面談も行われ人事考課制度に活かされている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々の能力が発揮できるように、役割や担当を任せてやりがいを持って働けるように心がけている。適性や意欲に応じて処遇改善にも努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内・外の研修案内を周知し、希望者が参加できるように、できる限りの勤務調整を行っている。強制ではないため、意欲的な職員と消極的な職員との差は否めず、改善したいと考えている。		

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会には、法人の代表が出席している。他法人の同業者とは、現状では研修や個人的な交流に止まっている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前のご家族との面談が主だが、入所後は全職員が利用者様の言葉や行動をひとつひとつ丁寧に受け止めて、情報共有しようと努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用者様のご家族と同じ世代の職員が多いためか、ご家族の思いを聞き出し、理解につなげることに長けている職員が多くいる。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人とご家族の思いを最優先した支援を心がけている。独居生活が限界になり入所したものの、迷いが消えず、在宅に戻る決断をしたケースもある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員も利用者様に教えられ、支えられ、癒されている。ひとつの大家族が、それぞれの役割を果たしながら、共に暮らしている感覚で生活を営んでいる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	それぞれのご家族の特徴を把握し、個々に応じた関わり方を職員は心がけている。入所後もご本人とご家族との絆が途絶えないように、支援者の立場を忘れないようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	利用者様が共に働いた同僚や部下、地域の役員仲間等が訪ねて来てくれる。年末年始の自宅帰省、地域の敬老会への参加、他施設入所中のご主人への面会等、積極的に支援している。	友人、知人、昔の同僚等来訪者が多く、お茶をお出ししている。知人に電話をされる方もおりホームの子機を使用している。年賀状等手紙を出す方もいるが宛名は職員が代書し出している。昔からの馴染みの場所へ出掛けるような時は家族がお連れしている。入居後に他の利用者とは親しい関係になり、一緒にテレビを見たり話を楽しんでいる利用者もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入所間もない時期は特に、孤立することがないように、相性をみながら、職員が間に入り働きかけるようにしている。		

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所先の自宅や病院に、ご本人やご家族の顔を見に訪問することがある。退所後1ヶ月経つ頃に、お礼や伺いの手紙もお送りしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入所時の情報の他に、日常の関わりの中から見えてくる利用者様の思いや意向を見落とさないように心がけている。ご家族からの聞き取り、職員間での話し合いも大切にしている。	数名の利用者を除き、自分の思いを伝えられる方が多い。日々の利用者との会話、特に1対1で接する「お風呂」や「トイレ」の時の言葉に注力し、その中から得られた思いや希望をアセスメントシートに追記し、全員で目を通し支援に取り組むようにしている。気持ちを表現できない方については行動や表情をよく見ながら汲み取っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者様の人生の歴史を大切にしたいと考えている。仕事やご家族との関係性、一人ひとりの違いを尊重した支援に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	できること、好きなこと、生活リズム等、一人ひとりの違いを把握し、理解するように心がけている。数名ではあるが、1日の状態を数日間シートに記入して、関わり方の見直しを試みた。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は、利用者様の視点を大切にするように意識して作成している。原案を事前に配布し、全職員の意見を反映し、随時見直しを行っている。	ユニット毎に全職員で全利用者に目を配るようにしている。介護計画の見直しは3ヶ月に1回行われ、毎月3名ずつカンファレンスを実施している。家族からは「今の状況を継続しつつ安らかに生活してほしい」との希望が多く、職員の意見も取り入れ、計画作成担当者と管理者により計画が作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画に沿った日々の記録はなかなかできていないが、日常の生活の記録を介護計画の見直しには活用している。現状は、記録を読む習慣がようやくついてきたところである。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	医師と看護師の協力体制が整っており、グループホームとしては医療面が充実している。そのため、突発的な体調不良時にはできる限りの対応ができています。		

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	入所前の関係が途絶えることなく、ボランティアとして訪問していただき、関係が継続できている方々がいる。楽器の演奏や野菜を届けに来てくださる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所の際、協力医に変更するかどうかは、ご本人とご家族の意思にお任せしている。希望があればご家族の協力を得ながら、かかりつけ医への受診も継続している。往診対応してくれる医師もいる。	かかりつけ医については入居時に希望を聞き対応している。半数の方が入居前からの主治医を継続し、その中には往診対応の医師もいる。残りの半数の方はホームの協力医を主治医としており、その医師が月2回往診している。また、隣設の老人保健施設の看護師が兼務で週1回利用者の健康管理を行っている。歯科については入居前からの医師での対応としている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回以上の訪問による健康チェックの他、夜間、休日でも電話での相談や助言をしてくれる熱心な看護師がいる。協力医も丁寧な対応をしてくれるので、心強い。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には必ず職員も付き添うようにしている。必要な情報提供の他、ご家族の不安も軽減できるように努めている。入院中も、時々お見舞いに伺うように心がけている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご本人、ご家族の意向を尊重し、ご希望に沿った最期を迎えられるように支援している。揺れ動くご家族の思いをその都度確認し、後悔のないように心がけている。かねてからの強い希望で、ご自宅に連れて帰って最期を迎えられたケースもある。	看取りに関する指針があり、本人や家族の意向を尊重し最期の時を迎えられるよう支援している。開設10年で15名の看取りを行っている。職員も多くの経験を重ね家族のような気持ちで取り組み家族からも感謝されている。その都度、振り返りと話し合いを重ね後悔のないように努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	数日間に分けて、朝礼時にAEDの使用方法を職員全員が練習した。また、応急手当普及員の資格を2名の職員が取得している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災委員会を中心に、夜間想定を含めた防災訓練を年2回、他地震想定訓練、非常時の情報伝達訓練を実施している。法人から手配される非常食の他に、緊急時用の食事も常備している。	年2回防災避難訓練を実施し、1回は消防署参加で消火器の訓練、連絡マニュアルを使った通報訓練も合わせて実施している。夜間想定訓練では参加できる利用者も参加し玄関までの誘導訓練を実施している。備蓄も毎年見直し、緊急に備え準備をしている。	

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	半期に1度、法人の接遇チェック表を用い、職員全員が自己の振る舞いを振り返っている。利用者様が生きてきた人生を尊重したうえで呼び方や、声かけを心がけている。	心の介護を行うべく利用者のプライバシーには特に気配りをしている。「親しい中にも礼儀あり」で日々接している中で感覚が鈍ることもあるので接遇チェック表を基に振り返りを行い、言葉遣いには気をつけ、尊厳を守るよう心掛けている。呼び方は苗字か名前を利用者の希望により選択し、気持を込め「さん」付けでお呼びしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その日着る服、飲みたいもの、お昼寝をするかしないか等、日常の中で、職員が全てを決めてしまうのではなく、ご本人が選び、決めることができるような働きかけを心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	危険がない限りは、「ご本人の好きなように、自由に」という考え方が職員間でできるようになってきている。「スケジュール」はあくまでもご本人が安心するための儀式のようなものでありたいと考えている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みの理美容院に行く方はいないが、訪問美容師が定期的に来て、ご本人の好みを聞きながら対応してくれている。毎日ひげを剃る、髪をとかす等の行為が、高齢になっても男性、女性であることを意識するきっかけとなっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備から後片付けまで、利用者様とともに行うのが習慣となっている。利用者様同士で食器洗いが取り合いになることもある。自宅では家事をしなかった男性も、いつの間にか役割を持っている。	殆どの方は自力で食事が出来る。食形態はトロミやミキサー食を必要とする方が多いという。献立、調理、食材調達は各ユニット毎に行っている。お手伝いは半数位の利用者が出来、中には配膳、下げ膳、洗い物、下準備まで全て出来る利用者もいる。誕生日やお盆、正月、家族会等、行事には特別食が出され全員で楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者様の好き嫌いだけでなく、好みの場所、温度等にもできる限り対応するように心がけている。食べ過ぎてしまう方、食事量が少ない方に対する支援も、ご本人が苦痛にならないように配慮している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	利用者様の状態に応じて、食前にも口腔ケアをしたり、義歯を紛失してしまう方は食後に義歯をお預かりしている。		

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンに合わせて、できる限りトイレで排泄できるように支援している。一人ひとりの「トイレに行きたいサイン」を見逃さないように心がけている。	自立の方は数名で、一部介助が三分の二、殆どの方がリハビリパンツ使用である。排泄パターンの把握は訴えや動きにより行い、食事の前後、おやつの前、お風呂の前、就寝前など、きめ細かな声掛けと誘導をし、トイレで排泄出来るよう支援している。また、排泄チェック表を作成し情報の共有を行い支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	「トイレに座って腹圧をかければ出やすい」「牛乳を飲むと効果がある」等、個々の特性を把握し、それに応じた支援を心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員体制により夜間の入浴はできていないが、決められた曜日、時間ではなく、ご本人が「入ろうかな、入りたいな」と思えるように、お誘いするタイミングを考慮しながら支援している。	自力で入れる方は若干名で残りの方は介助が必要である。週2回以上の入浴を行っており状況に応じて対応している。入浴拒否の利用者も数名いるが、時間を変えたり、トイレに起きたついでに誘うなど、全員が2回以上は入浴できるようにしている。季節によって「ゆず湯」や「菖蒲湯」などを行い、日常は入浴剤で香りを楽しんでいる。家族と日帰り温泉に出掛けたり、正月には泊りで温泉に行く利用者もいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日記を書く、夕食の後片付けをする、見回りをする等、寝る前にすると安心して眠れることがある利用者様には、それができるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	誤薬を防ぐために、薬のセットから服薬まで、複数の職員で複数回チェックしている。薬の副作用が心配される時は、看護師や医師に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	女性だけでなく、男性も食器拭きやモップ掛けを役割としてして下さる。転倒の危険のある他利用者様の見守りを、自主的にされている利用者様もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩や外出支援等、できる限り希望に沿えるように努めている。全員揃っての外出はできていないが、個別に少人数ずつ、またはご家族の協力を得ながら、外に出る機会を作る努力をしている。	日常的にはホームの中を歩いている。天気の良い日にはホームの回りを少人数に分かれ、車イスの方も一緒に散歩している。また、暖かい日にはホームの中庭に出て外気浴を楽しんでいる。外出の年間計画があり、春にはお花見、福寿草見学、秋には紅葉狩りに出掛け、地区で行われる「ふれあい広場」や「運動会」等の行事には参加者を募り外出する機会をできるだけ多く作るようにしている。	

グループホームわかな

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者様の状態により、施設で管理している。預かり金の取り扱いについては入所時に説明し、毎月欠かさず領収書とともに、ご家族に報告している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族の仕事時間等に配慮しながら、利用者様からご希望があった際には、電話でお話して頂いている。また、はがきや年賀状等のやりとりも支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	花好きの利用者様の居室窓から見えるように、花を植えたりしている。ホールの大きな鏡により混乱が強くなってしまいう利用者様のために、鏡を絵で見えないようにして不安を取り除いている。	ホーム全体が広くゆったりとしている。一日の多くの時間を過ごす共有部分はオープンキッチンを含んで食堂とホールが配置され利用者が寛ぐスペースが確保されている。天井が高く開放感があり、利用者がテレビを見たり、話をしている姿が見られた。壁には「100歳のお祝い」や誕生日会、クリスマス会等、行事の際に撮られた利用者笑顔一杯の写真が数多く飾られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	耳の遠い利用者様にテレビの音が聞こえるように、ソファの配置を工夫している。好きな場所で過ごして頂けるように心がけている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室はできる限り自宅の自室に近づけるように、使い慣れた家具等を持ち込んで頂きたい旨を、入所時にお願いしている。	各居室入口には花の名前と写真が飾られている。洗面台が備え付けられ清掃も行き届き清潔感溢れる居室となっている。使い慣れた家具等が持ち込まれ、また、家族の写真や自作の作品等も飾られ、思い思いの生活を送られていることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	間違えやすいトイレの数種類のボタンを、不要なものはテープで覆ったり、ポータブルトイレ使用者のベッドの足元に滑り止めマットを敷く等、持っている力を活かせるように心がけている。		